The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	清華簡『繫年』および郭店楚簡『語叢（一）』の「京」字に関する一考察
Author(s)	曹, 方向
Citation	中国研究集刊. 2014, 58, p. 138-146
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/58680
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

中国研究集刊　闕号（総五十八号）平成二十六年六月　一三八―一四六頁

清華簡『繫年』および郭店楚簡『語叢（一）』の「京」字に関する一考察

曹　方向
（草野友子　訳）

はじめに

本稿は、清華大学蔵戦国竹簡（以下、清華簡）『繫年』および郭店楚墓竹簡（以下、郭店楚簡）『語叢（一）』を中心に、戦国文字中に見える「京」字について考察するものである(注1)。

一、戦国文字中の「京」の字例

近年公開された清華簡『繫年』第二章の第9簡・第10簡には次のような字形がある（以下、Aと表記する）。

A

整理者はAの字を直接「京」と釈読している。ここに関係する簡文は、以下の通りである。

晉文侯乃逆平王于少鄂、立之于京師。……晉人焉始啟于京師。[A]

（晉文侯は乃ち平王を少鄂より逆えて、之を京師に

立つ。……晋人 焉に始めて京師に啓く。）

整理者は注釈の中で、『公羊伝』の「京師者何。天子之居也（京師とは何ぞや。天子の居なり）」を引用してこれを証明しており、この用例は適切であると考えられる。しかし、字形から見ると、依然として疑問が残る。Aはこれまでに見られる戦国文字の中では、以下のような字形に類似している。

字形1： （陶文）(注2)

（貨幣文）(注3)

字形2： （陶文、出処は右に同じ）

これらの字について、これまで主流の解釈は、すべて「亳」と釈読するというものであった(注4)。しかし、早くから、異なる見解を示す研究者もいた。呉振武氏は各時期の諸研究者の意見を全面的に紹介し、最後にこの種の字形は「宅」に従い、「亭」の省略形に従い、「亭」と釈読すべきだと述べている(注5)。これにより、先に挙げた陶文の字形の用法は、比較的合理的な解釈を得ることとなった。

一方、郭店楚簡には以下のような字形がある。

字形3： （『語叢（一）』第33簡）

この字形（以下、Bと表記する）がある文例は、「禮生於莊、樂生於B（礼は荘より生じ、楽はBより生ず）」であり、明らかに「亭」に作ることはできない。これに関して、先行研究においてもいくつかの見解があるが(注6)、いずれも適切であるとは言い難い。かつて最も影響があった劉釗氏の観点については(注7)、呉振武氏がその中の問題を指摘している。呉振武氏は字形3を「寧」と釈読し、以下のように述べる。

> 有名な子犯編鐘銘文が鐘を作った目的について述べる時、「用匽（燕）用寍（寧）」という一語があり、人の安寧と音楽の関係とは、ここにおいて理解するべきである。音楽が人を安寧にさせることができる以上、人の安寧にもまた音楽が必要であり、簡文の「樂生於寧」とはまさしくこの意味である。

また、「禮生於莊、樂生於B」の二句に対する注釈には、

「礼儀は荘敬によって生じ、音楽は安寧によって生じる。」と書かれており、このように文意を解釈することも可能である。簡文のこの八字は礼・楽について論じており、例えば、儒家の説く「樂者、心之動也（楽は、心の動なり）」（『礼記』楽記）に基づくと、Bは心のある種の状態を表していると考えられる。ただし、この解釈が適切であると考えるには、依然として論拠が不十分であろう。

Aの字例を見ると、Bと同じく、「亭」字を用いて解釈するにはあまり適合せず、それゆえこの種の字形はさらに検討する余地がある。楚地から出土した戦国簡冊中には、以下のような字形がある。

字形4： （上博楚簡『三徳』第7簡に三例、および第21簡）

この字形（以下、Cと表記する）は上博楚簡『三徳』中に四例見られ、写法はすべて一致している。ただし、第21簡は竹簡の残欠により、字例が完全とは言えないため、ここでは論じないこととする。第7簡の簡文は、「皇天弗京」、「上帝弗京」（この句は二度見られる）となっており、整理者の李零氏は「京」を「諒」と釈読している(注8)。陳偉氏はこの字に疑問を抱いており、「下部について言えば、楚簡中に見られる「就」字によく似ている」と述べ、さらに葛陵楚簡乙四・第109簡の字形を例として、この字を「就」と釈読することを主張している(注9)。李零氏が釈する「京」字は、戦国文字の「京」字と確かに近いものである。

字形5： （『陶彙』5・437）(注10)

（貨幣文）(注11)

（戈）(注12)

以上の字形を見ると、李零氏がCを「京」と釈するのは正しいことがわかる。『三徳』では、「京」は「諒」と読み替えられており、これは字例や韻脚からも適切であると言える(注13)。李守奎氏は、李零氏の「京」と釈する意見を肯定した後、以下の説を提示している。

楚国の「」字は多くに作り、従うところの「亯」と「京」とは偏旁を共有しており、一種の

簡略化された形式である。もし 字の中間の を取り除くならば、残る文字はである。(注14)

この「京」字の旁の写法とCも非常に近い。さらに、

字形6： （葛陵楚簡乙4－96）

このように、「就」字の従うところの「京」字の例もあり、参考に値する。この字の下半部 とAとの区別は、主に縦画が湾曲していないところにある。周知の通り、戦国文字は、時には縦画は下に垂れ、末尾も湾曲していることがある。例えば、葛陵楚簡の「就」字は一般的に（甲3－137）と書写され、また以下のようにも書写されている。

字形7： （葛陵楚簡甲3－56）

この種の縦画の湾曲は、葛陵楚簡中に比較的よく見られる。このことから、清華簡『繫年』の整理者がAを「京」と釈する説は成立することがわかる。AとCとの区別としては、「高」字の下部分の「口」を省いた筆画が、Cは右側が下に向かって折れている一方、Aは下に折れていないことが挙げられる。しかし、これも以下のような前例がある。

字形8： （包山文書、第49簡）

字形9： （望山二号墓、第13簡）

葛陵楚簡甲3－56のような「就」字は、郭店楚簡と包山楚簡の中にあり、縦画が下に垂れた後には転折の写法が見られないが、これは書き手の書写の習慣がそのようにさせていると考えられる。また、A・Bは葛陵楚簡乙4－96とは異なり、縦画が湾曲していて、「乇」と形が近い字になっている。ただし、楚文字中に大量に（郭店楚簡『老子』乙本第8簡）のような字が出現し、独体（一個の部分で字をなす文字）の「京」字の下部の写法はこれと接近しているため、「類化」の現象として解釈しても良いかもしれない(注15)。これと平行する現象として、「年」・「帀（師）」などの字を例として挙げてみよう。

【表1】

	「京」	「年」	「帀」	「乇」に従う字
1	(A)	九店56号墓楚簡 第26簡 上博楚簡 『容成氏』第5簡	包山楚簡 第228簡 上博楚簡 『武王践祚』第1簡	包山楚簡 第277簡(注16) 上博楚簡 『容成氏』第2簡「宅」
2	(B) (C)	包山楚簡 第126簡 郭店楚簡 『成之聞之』第30簡	包山楚簡 第2簡・第12簡 上博楚簡 『呉命』第8簡	郭店楚簡 『成之聞之』第34簡「宅」 包山楚簡 第171簡「宅」(注17)

【表1】を見ると、AとCとの一つの区別としては、下側の筆画の運筆方向が異なる点が挙げられる。ただし、これは筆画の正・反の問題にすぎず、例えば表中の包山楚簡の第2簡・第12簡の「帀」字はこの一種である。Bの上部の「亠」字の頭の下には「口」に近い形の筆画があり、この種の区別は同一の文字の異なる写法であり、本論の最初に列挙した「亳」字あるいは「亭」字が参考になる。

このように、A・B・Cの三字を「京」と釈読するのは、成立可能であると言うことができる。本論のはじめに列挙した陶文・貨幣文の字形は、A・Bの写法と非常に近い。これらの「京」字の語義については、趙平安氏による優れた解釈があり、参考に値する(注18)。

二、郭店楚簡『語叢（一）』の「京」字

それでは、以下、郭店楚簡『語叢（一）』の「禮生於莊、樂生於京」について検討してみたい。

前述の例やC字によって「京」を「諒」と釈読すると、諒解あるいは誠・信などの意味であると考えられる。『礼記』楽記に、以下のような一文がある。

禮樂不可斯須去身。致樂以治心、則易・直・子・諒之心、油然生矣。易・直・子・諒之心生則樂。樂則安。安則久。久則天。天則神。

（礼楽は斯須（しばらく）も身を去るべからず。楽を致して以て心を治むれば、則ち易・直・子・諒の心、油然として生ず。易・直・子・諒の心 生ずれば則ち楽しむ。楽しめば則ち安し。安ければ則ち久し。久しければ則ち天なり。天なれば則ち神なり。）

郭店楚簡『語叢（一）』に見える「樂生於諒」は、『礼記』楽記の「易・直・子・諒之心生則樂」の別の一種の表現であると考えられるが、『語叢（一）』の側は表現が比較的単純である。『礼記』楽記は、四種の「心」が「樂」を生成できることについて言及しており、簡文ではただその中の一つについて述べるのみである。しかし、両者の基本精神は一致しており、「諒」は原諒（許す、容認する）と解釈でき、つまり寛容な態度を表していると言える。あるいは誠・信と解釈でき、あるいは善良の「良」と読むこともできる。これと易（「和易」）・直（「正直」）・子（「慈愛」）とはすべて心の修養の優れた資質（品性）のことを指している(注19)。『礼記』楽記には、先に引用した段落が終わった後に以下のような一文がある。

致禮以治躬則莊敬。莊敬則嚴威。心中斯須不和不樂、而鄙詐之心入之矣。外面斯須不莊不敬、而易慢之心入之矣。故樂也者、動於內者也。禮也者、動於外者也。

（礼を致して以て躬を治むれば則ち荘敬なり。荘敬なれば則ち厳威あり。心中斯須も和せず楽しまざれば、而ち鄙詐の心 之に入る。外面斯須も荘ならず敬ならざれば、而ち易慢の心 之に入る。故に楽なる者は、内に動く者なり。礼なる者は、外に動く者なり。）

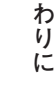
礼・楽が内外に分けられるというのは、儒家学派によく見られる言説であり、簡文の「禮生於莊、樂生於諒」は、先に引用した『礼記』楽記の二つの文の精神とも基本的に一致するものであることは注目に値する。

『論語』八佾篇には、「子曰、人而不仁如禮何。人而不仁如樂何。（子曰く、人にして不仁ならば、礼を如何せん。人にして不仁ならば、楽を如何せん。）」とあり、何晏注には、「包曰、言人而不仁、必不能行禮樂。（包曰く、人にして不仁ならば、必ず礼楽を行うこと能わざる

を言う。)」とある。また、邢昺疏に、「此章言禮樂資仁而行也。「人而不仁如禮何人而不仁如樂何」者、「如」、奈也。言人而不奈此禮樂何。謂必不能行禮樂也。(此の章 礼楽 仁に資りて行うを言うなり。「人にして不仁ならば礼を如何せん、人にして不仁ならば楽を如何せん」とは、「如」は、奈なり。人にして此の礼楽を奈何ともぜざるを言う。必ず礼楽を行うこと能わざるを謂うなり。)」とある。孔子の「仁」が内包していることは実に豊富であり、例えば、『論語』陽貨篇の「子張問仁於孔子」の章には五種の「仁」が列挙され、それぞれ「恭・寛・信・敏・惠」とされている。もし恭敬が「莊」に近く、寛容あるいは誠信が「諒」に近いならば、「禮樂資于仁」(礼楽は仁に基づく)は、ある種の程度上では、まさに「禮生於莊、樂生於諒」とも言える。

先秦の典籍は礼楽に関する資料が非常に豊富である。簡文は格言の形式によって礼楽と心の資質(品性)の生成関係を述べており、『礼記』楽記などの文献と伝承関係があるかどうかについては、今後さらに研究を進める必要がある。

おわりに

以上、戦国文字中に見える「京」字を検討してきた。これまで ・ ・  ・・などの字形は、「亳」・「亭」・「京」などと釈読されてきたが、本論を総括すると、これらはいずれも「京」と釈読するのが正しいと言うことができる。下部の写法の差異は、戦国文字の中では決して特異な例ではない。従って、清華簡『繫年』においては「京師」の「京」、上博楚簡『三徳』および郭店楚簡『語叢(一)』においては「京」と釈し、「諒」と読むことが可能である。また、『語叢(一)』の「禮生于莊、樂生于諒」と『礼記』楽記では、礼・楽と人の心の修養との関係を詳しく述べており、対比して読むことができる。これら二つの文献が述べていることは全てが同じであるとは言えないが、我々が古人の礼・楽観念を理解する一助となるであろう。

注

(1) 以下に引用する釈文は、『清華大学蔵戦国竹簡(二)』(清華大学出土文献研究与保護中心編・李学勤主編、中西書局、二

○一一年十二月）、および『郭店楚墓竹簡』（荊門市博物館編、文物出版社、一九九八年五月）による。

（2）王恩田『陶文字典』（斉魯書社、二〇〇七年一月）、一三六頁。また、湯餘恵『戦国文字編』（福建人民出版社、二〇〇一年十二月）、三三九頁も参考になる。

（3）呉良宝『先秦貨幣文字編』（福建人民出版社、二〇〇六年三月）、八一頁。

（4）例えば、筆者がこれらの字形を引用した時に依拠した三種の辞典・文字編（注2・3参照）では、すべて「亳」の字の項目にこの文字が収録されている。

（5）呉振武「談左掌客亭陶璽―従構形上解釈戦国文字中旧釈為「亳」的字応是「亭」字」（中国古文字会第十八次年会論文、二〇一〇年十月二十二日・二十三日）参照。以下に引用する呉振武氏の説は、すべてこの論文に基づくものであるため、重ねて注記しない。

（6）陳偉等著『楚地出土戦国簡冊［十四種］』（経済科学出版社、二〇〇九年九月）、二四八頁注釈一五、および武漢大学簡帛研究中心・荊門市博物館編著『楚地出土戦国簡冊合集（一）郭店楚墓竹書』（文物出版社、二〇一一年十一月）一四五頁注釈三三参照。

（7）劉釗氏は、「亳」と釈し、「度」と読み替えている。劉釗「読郭店楚簡字詞劄記（一・二・三）」（『出土簡帛文字叢考』、台湾古籍出版社、二〇〇四年三月）参照。

（8）李零氏による釈文は、『上海博物館蔵戦国楚竹書（五）』（馬承源主編、上海古籍出版社、二〇〇五年十二月）、二九三頁参照。

（9）陳偉「上博楚簡（五）零劄（一）」、武漢大学簡帛研究中心「簡帛網」（http://www.bsm.org.cn/）、二〇〇六年二月二十四日。

（10）王恩田『陶文字典』（前掲書）、一三九頁。湯餘恵『戦国文字編』（前掲書）、三四一頁。

（11）呉良宝『先秦貨幣文字編』（前掲書）、八三頁。

（12）孫剛『斉文字編』（吉林大学碩士学位論文、二〇〇八年四月）、一一〇頁。

（13）王晨曦『上海博物館蔵戦国楚竹書（三）〈三德〉研究』（復旦大学碩士学位論文、二〇〇八年五月）、三七～三八頁。

（14）李守奎「包山楚簡120―123号楚簡補釈」（『出土文献与伝世典籍的詮訳』、復旦大学出版社、二〇一〇年十月）、二〇九頁。

（15）これはすなわち劉釗氏が論ずるところの「同一系統のその他の文字の影響を受けて発生した類化」である。肖毅氏はこれを「字外同化」と称する。劉釗『古文字構形学』（福建人民出版社、二〇〇六年一月）第六章第二節、および肖毅『楚簡文字研究』（武漢大学出版社、二〇一〇年十月）第二章第四節参照。

（16）この字は「糸」に従い「乇」に従うが、具体的な釈読につ

いては今後の研究を待つ。劉国勝『楚喪葬簡牘集釈』（科学出版社、二〇一一年十一月）、六四頁注釈八一参照。

（17）この字は整理者は「反」と釈し、何琳儀氏は改めて「宅」と釈している。陳偉等著『楚地出土戦国簡冊［十四種］』（前掲書）、八四頁注釈四三参照。

（18）趙平安氏は、陶文の「京」は穀倉であるとの見解を示している（「「京」「亭」考弁」、『復旦学報（社会科学版）』、二〇一三年第四期）。筆者は本論の初稿において、「亭」と読み、地方で賓客を接待する宿泊所であると見なす呉振武氏の解釈には道理があると考えていたが、「京」と「亭」とは通仮の関係にある可能性がある。現在は、趙平安氏の解釈が妥当であると考えている。

（19）括弧内の解釈は、楊天宇『礼記訳注』（上海古籍出版社、二〇〇四年七月、五〇二頁）を参考にした。

【附記】

本稿は、二〇一一年に執筆を開始し、二〇一二年に「小議清華簡〈繫年〉及郭店簡中的「京」字」として発表した（武漢大学簡帛研究中心「簡帛網」（http://www.bsm.org.cn/）、二〇一二年一月二日）。草稿はかつて李天虹先生・劉国勝先生・楊華先生・宋華強先生・郭永秉先生らのご教示・ご批正を賜った。二〇一三年には、趙平安先生に直接ご教示いただく機会があり、氏の論文中には筆者の見解も引用されている。

また、二〇一四年一月二十二日に、大阪大学において中国出土資料講座「戦国文字中的「京」及相関問題」として発表する機会を得た。その際、湯浅邦弘教授・竹田健二教授・福田一也博士・草野友子博士・金城未来博士および大阪大学中国哲学研究室の方々よりご教示・ご批正を賜った。また、草野博士には講座の際の日本語通訳と本稿の翻訳をしていただいた。各位のご厚情に対し、この場をお借りして、心より御礼申し上げたい。